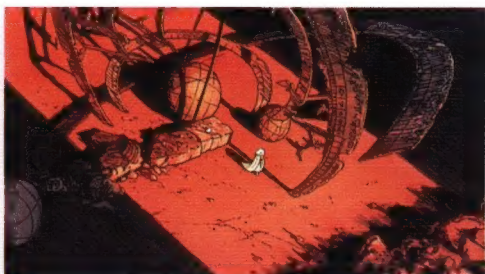
Animage '85 12月号第2ふろく
天使のたまご
GUIDE BOOK

〝天使のたまご〟
少女はたまごがかえって
天使＝鳥になるのだという
夢を見ていた
少年はかすかに記憶する
〝鳥〟を見たという夢を
たどりつづけていた
少女と少年は
ふたり以外のすべてが
〈影〉でしかないような
無人の街で出あう
この世界に存在する
たったふたりの最後の人類
しかし
少女は少年に
少年は少女に
ほんとうに出あったのか？
たがいの夢をかかえつつ
ふたりは
すれちがっただけ
なのかもしれない
——いや
ふたりは出あったのだ
たしかに　ただ
おたがいの夢の破産を
それぞれ宣告するために
これはそんな寓話である

PART1 フィルム・ストーリー

12月15日発売をまえに、急ピッチで作業はすすんでいます。現在完成しているカットのなかから、いくつかを選んで、フィルム・ストーリーを構成してみました。ただ、フィルムをつないでみないと、ここに選ばれたカットが、前後のつながりのなかで、どう見えるかはわかりません。そんなことも考えながら、楽しんでください。

少女

崩れかけた巨大な天球儀が少女の寝床だった。黄昏に眼ざめると、たまごを抱え、妊婦のような姿で、街へ出かけた。その日課を毎日くりかえした。少女はだれにもあわなかった。

①寝床のうえに、だいじにおかれた〝たまご〟

②少女はスカートのすそをもちあげて

③たまごをそのなかに包みこんだ

④そして、お腹にたまごを抱えこむ

⑤巨大な天球儀が暗やみのなかにある

⑥不意に少女がからだをおこす

⑦たまごを抱えた姿はまるで妊婦のようだった

⑧お腹のたまごをいとおしむように抱える

⑨少女の足が、かろやかに床をけってゆく

落日の射しこむ〈方舟〉のなか、崩れかけた天球儀が少女の寝床だっ

▲水の満たされたビンをとおして見ると、世界は美しいミクロコスモスになる

▲方舟と街のあいだに横たわる森。少女はその森の坂道をくだってゆく

▲地下から水がわいてくる。影がゆれている

▲森のなかの沼のほとり。少女はビンに水をくんでいる

街に入ると、道はすべて迷路のよう▶

▲だれが使っていたのか、捨てられた生活用品のなかから、少女はガラスビンをみつける

影のなかから少女が姿をあらわす▶

魚の街で

▲怪魚の口から水が流れている

少女が歩み入る所、それは石畳の下に水をひそませた街だ。怪魚の装飾が建物をいろどり、過去の亡霊のような〈影〉たちが、魚の出現を永遠に待ちつづける。そこで、少女は〈他者〉に出あう。

▲不安そうに、少女は窓をながめている

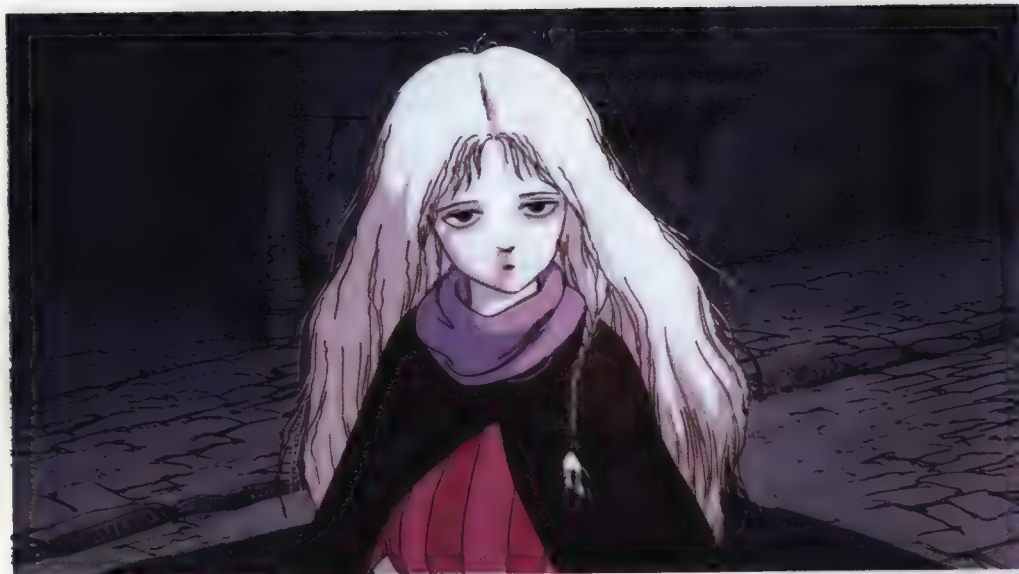
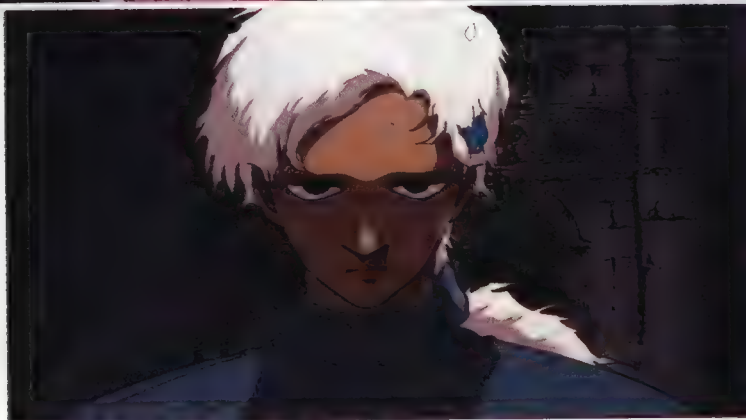
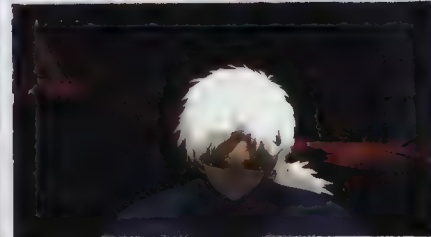
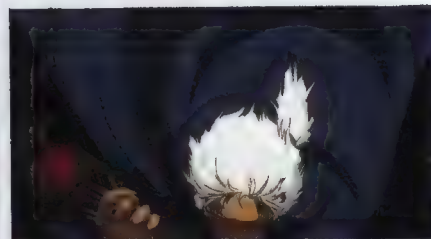
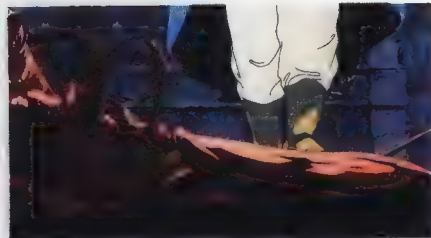
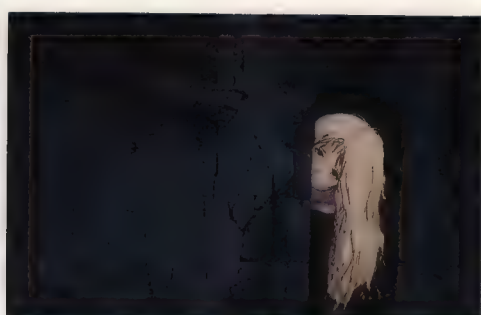
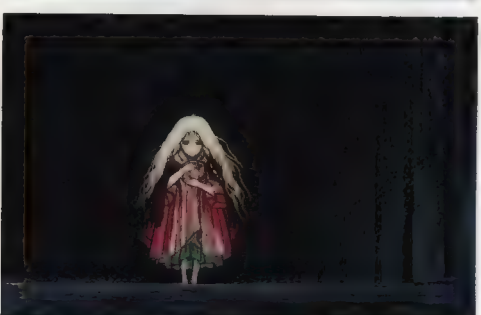
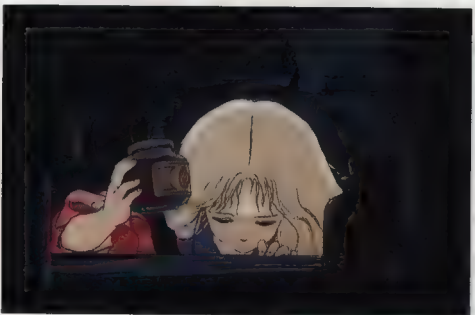
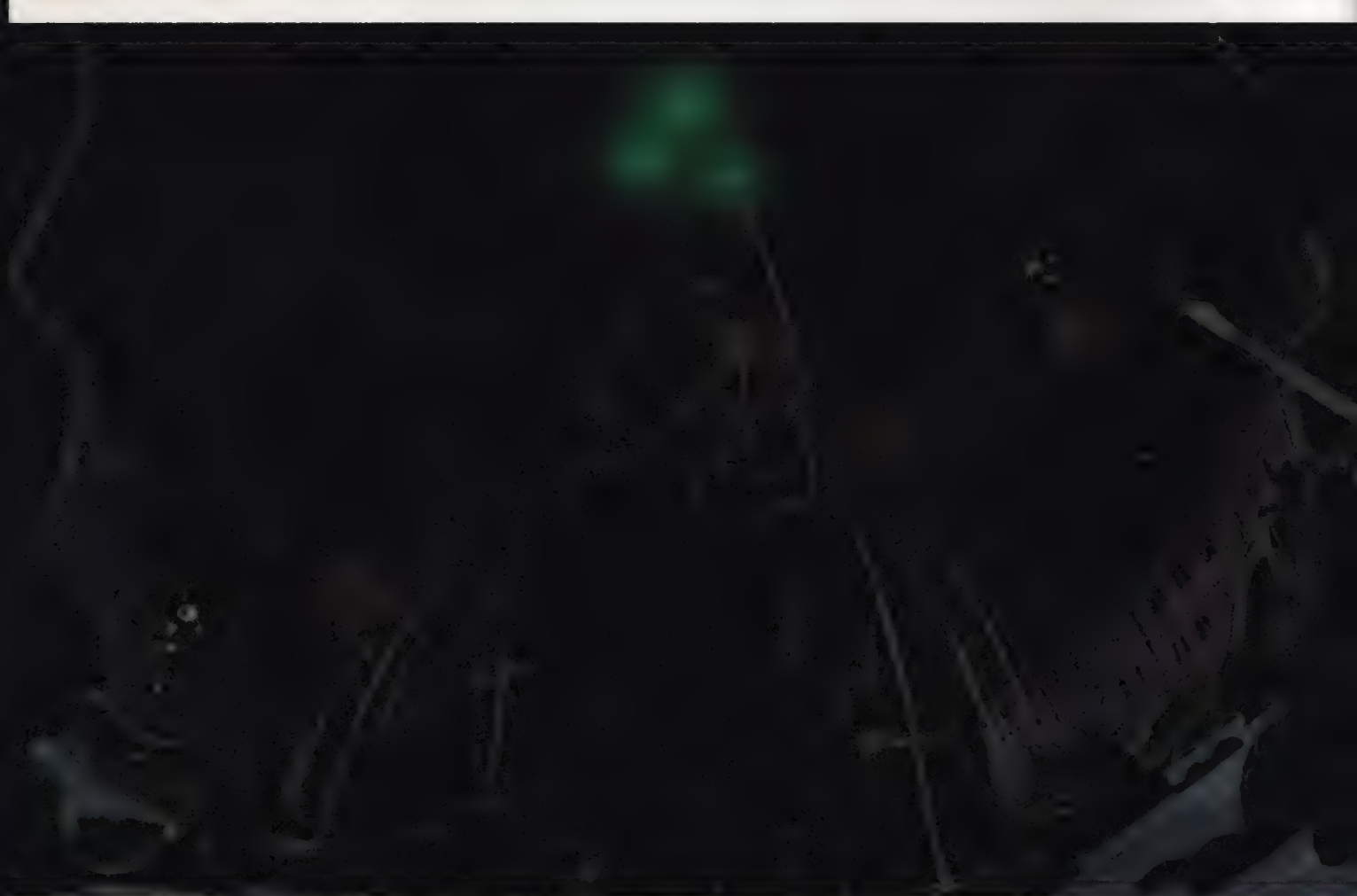
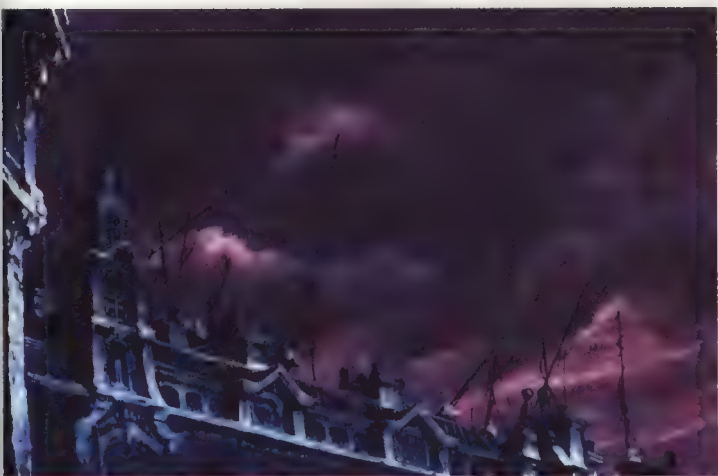
▲窓のなかの少女。だれかが建物のなかからながめている？

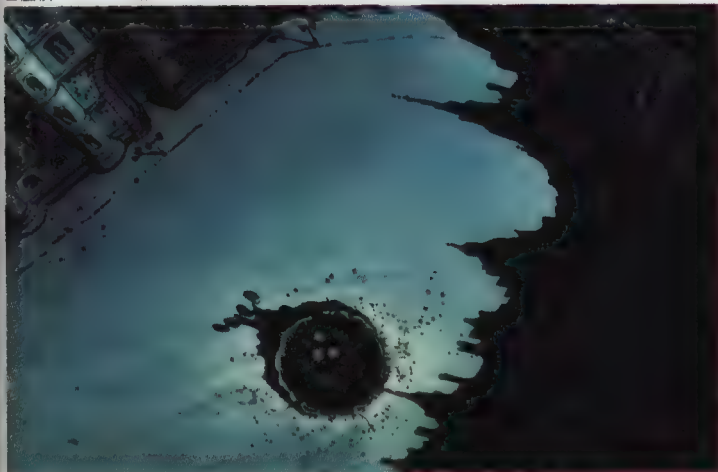
▲窓のまわりに、古びた銛（もり）がつきささっている

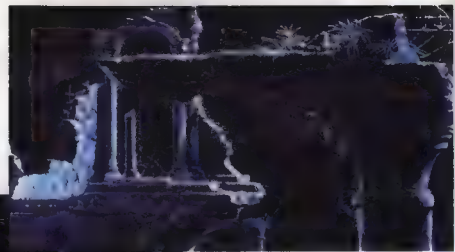
▲それとも、窓のなかにとじこめられている？

▲街のメインストリート。巨大なキャタピラ音をひびかせて

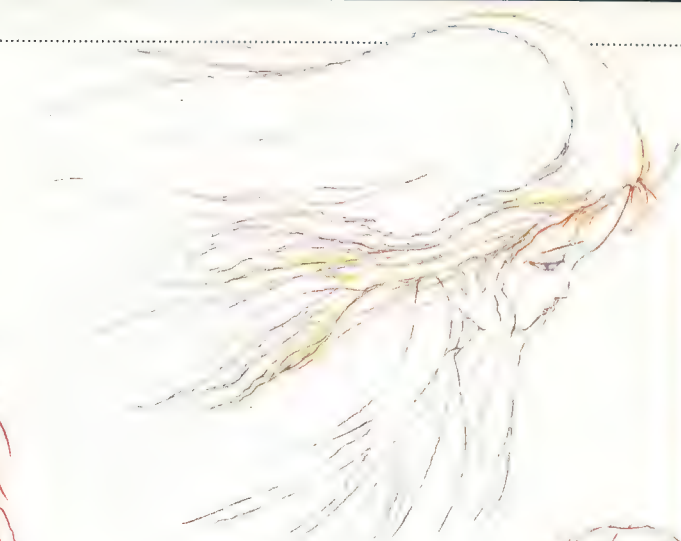
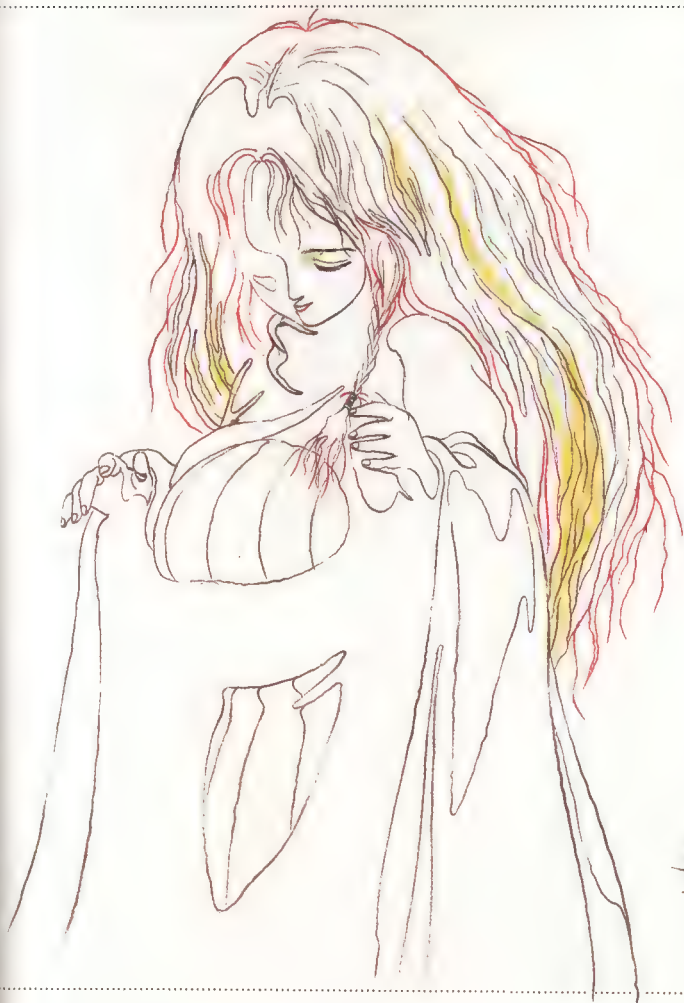
▲奇怪な戦車がのぼってくる。その戦車の上に人影があった

◀首をかしげて、それを見あげる少女

▲はじめて見る〈他者〉＝少年をみつめる少女

無言のままの少年▶

▲とびおりてきたのは少年だった

少女と少年が出あうとき。
少女の心におののきが走る。それは不安と期待が入りまじった感情だ。少女はパッと身をひるがえし、少年の前から姿を消す。しかし、こわごわ顔を出して、少年の姿はもうなかった。少女は無人の街路に立ちつくす。
少女は、自分の〝日課〟にもどる。無人の商店のなかで、ビン詰めのジャムらしきものを、棚から取り、自分のカバンのなかにしまう。

▲街の中心部の噴水。少女はビンのなかに水を満たし、そこから世界をながめる。水のなかのミクロコスモス

▲屋根の上にも〈影〉たちが待つ

▲噴水のまわりにうずくまる〈影〉たち

▲噴水の広場に建物の影が黒く尾をひいている

▲ただひたすら魚の出現を待つ〈影〉たち

▲〈影〉たちにおびえたのか、少女は走って廃墟までやってきた

作監名倉靖博さんの修正原画より

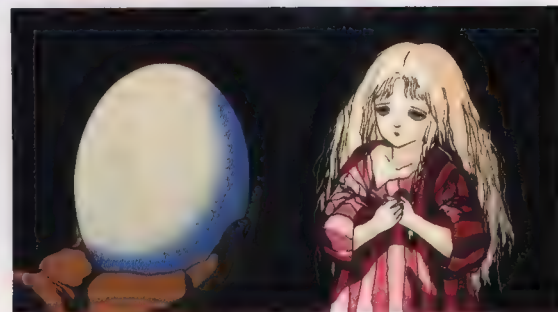
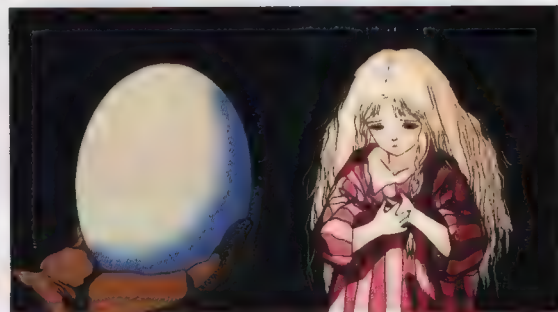
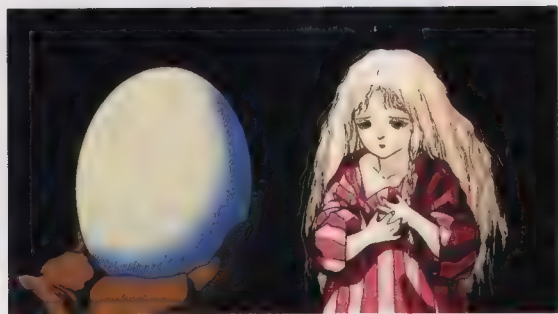
INTERMISSION

▲少女の目のまえに圧倒的に存在する少年

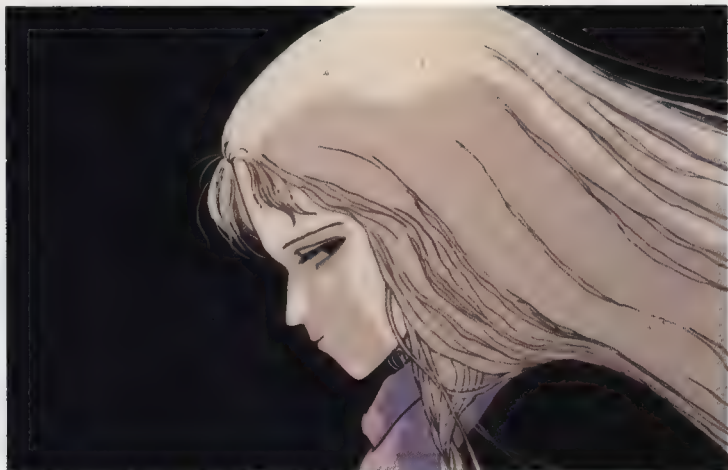
▲少女がたまごを置いた場所に戻ってみると

受胎告知

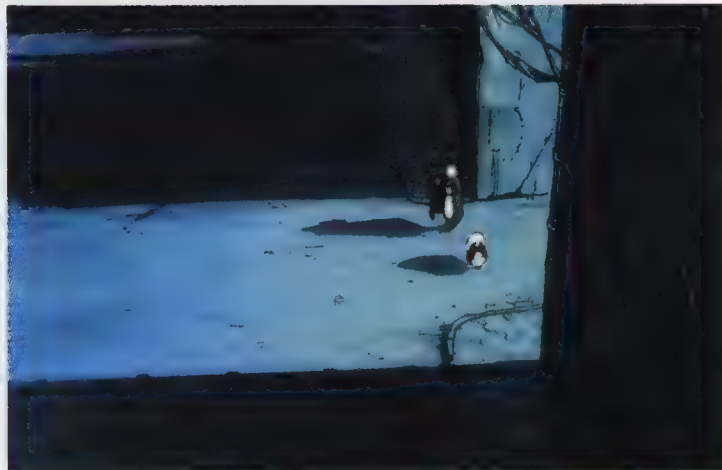
少女はたまごを置き、廃墟の階段をおりて、ひと休みする。もとの場所に戻ってみると、少年の後ろ姿がみえる。2度目の出あい。少年は、少女のたまごをさし出す。まるで、キリストの懐胎をマリアに告げる、天使ガブリエルのように。少女はたまごを受け入れる。

「大切なものは
お腹のなかに
入れておかなければ
喪くしてしまうよ」

▲少年はひざまずくようにたまごをさし出す

▲長くためらいながらも、それを受けとる少女

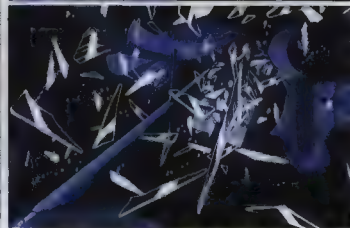
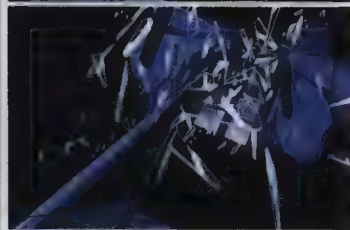
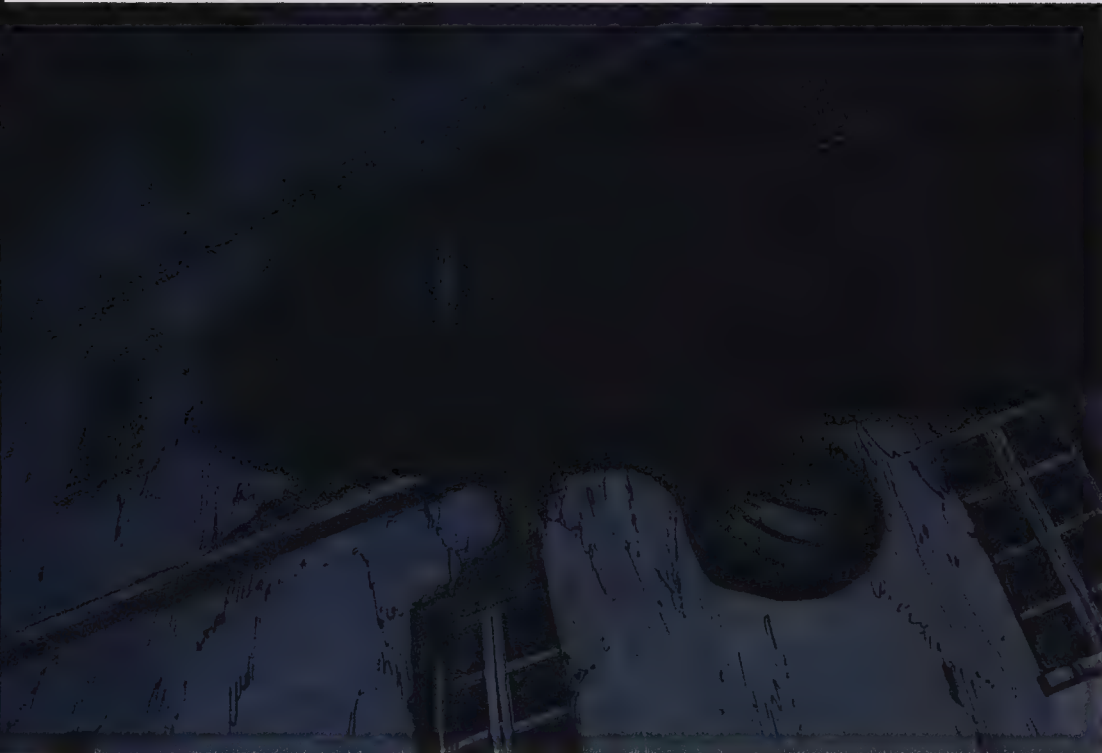
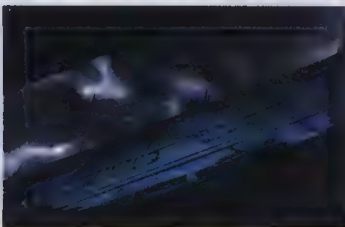
「そんなこと教えられないわ
……だって私　あなたを知らないもの」
「そのたまごのなかには
なにが入っているのかな？」

▲少年がついてくるのを知って、ほほえむ少女

▲廃墟から出て、少女と少年は夜の街へ出てゆく

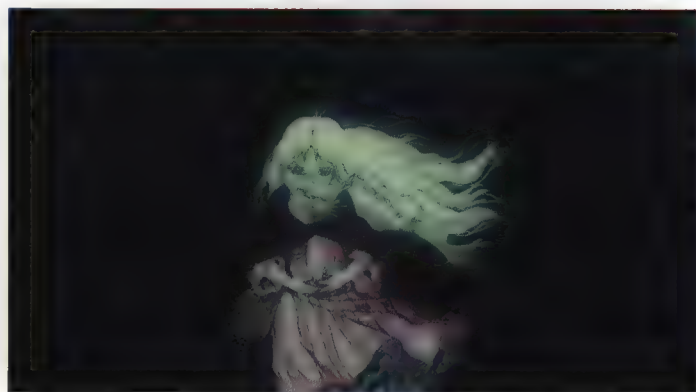
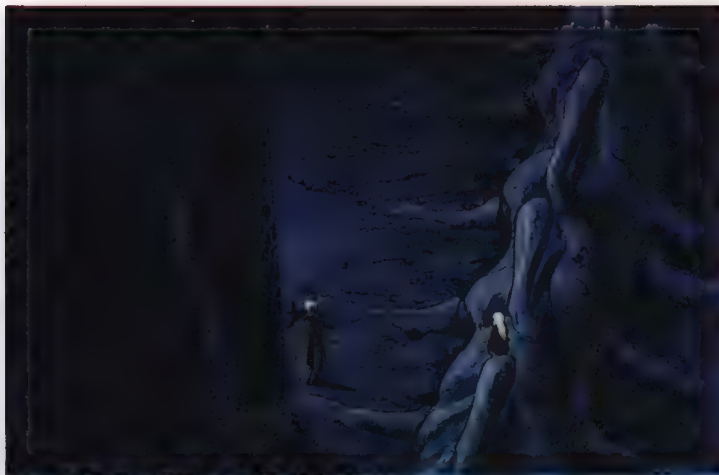
▲少年の表情は思いつめたようにかたい

▲少年は少女のあとをたえずついてゆく

▲ポツンとここだけ青い街灯

▲少女が立ちどまると、少年も立ちどまる。少女はガラスビンから水を飲み、少年にもさしだす。少年は首を横にふる

▼ユラリと巨大な影だけを現わす〈魚〉

▲窓ガラスをわって、とびこんでくる銛（もり）

▲建物の上から〈影〉たちが銛を投げこむ

ふたりは少女の住みかの〈方舟(はこぶね)〉に帰ってくる。少女は、たまごがいつか“天使”＝鳥になると信じている。少女は化石となった天使のいる場所へ、少年を導く。

天使の化石

▲方舟の内部は、巨大な生物の骨格のようにもみえる

▲少女が手をふって、少年をまねく

▲系統樹がきざまれた石板（プレート）をさわる少年の手

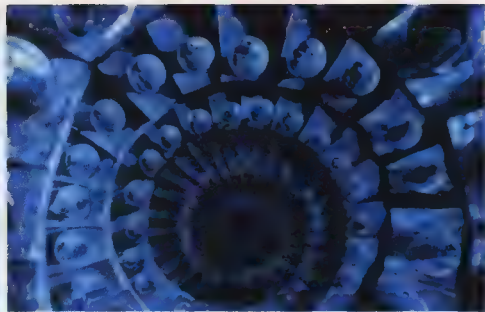
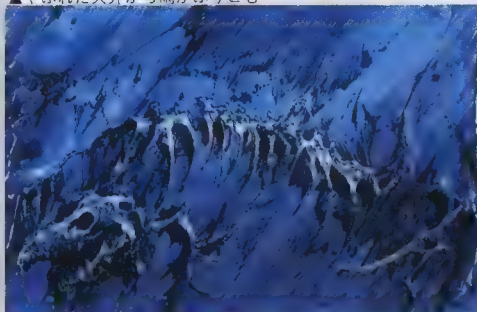
◀その石板のまえで、少年は〝鳥の記憶〟について語る

「これと同じ樹を見たことがあるよ。あれはいつのことだったのか。忘れてしまうほど遠い昔……。音をたてて雲が流れてゆく空の下、真黒な地平線がそのままもりあがって、生まれた大きな樹。大地から精気を吸いあげて、脈打つ枝をのばし、なにかをつかんでいたたまごのなかの……
……眠りつづける大きな鳥を！」

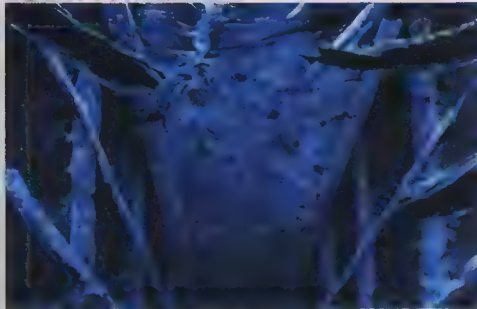
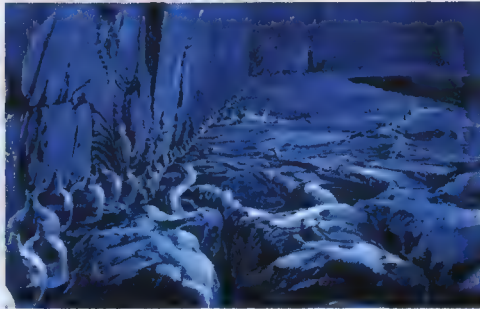
「いまでもそこにいて
夢をみつづけているよ」

「その鳥はどうしたの?
どこにいるの?」

▲やぶれた天井から雨がふりこむ

▲巨大な化石のおおう通路

▲方舟のなかのラセン階段

▲壁面にきざまれた化石の群れ

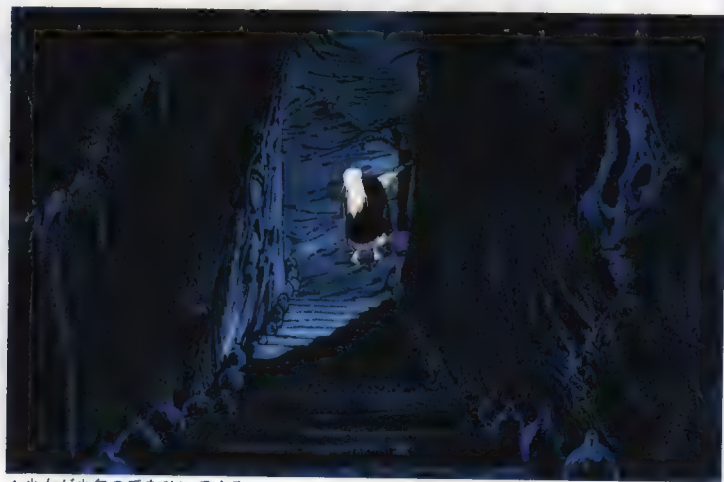
▲“化石の回廊”に入ってくるふたり

▲ふたりはそれを登ってゆく

▲はるかな高みからつづく化石の壁

▲床にも化石がおびただしく残る

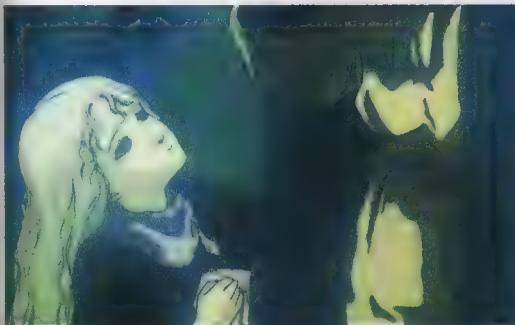
▲階段には少女の集めたビンがならぶ

少年は自分がどこからやって来たのか、それももう忘れてしまっていた。ただ、自分が見た〝鳥〟の記憶をかすかなたよりに、放浪してきた。
　少年はこういった。
「きみもぼくも、あの魚たちのように、とっくにいなくなった人たちの記憶でしかなくて、ほんとうは、だれもいない世界に、雨が降っているだけかもしれないんだ。鳥なんか、はじめからいなかったのかもしれない」

▲「いるよ！」少女は少年の求める〝鳥〟を知っているようだ

▲ふたりは袋小路をすすむ

▲少女が少年の手をひいてくる

少年はとうに気づいていた。少女の夢みる鳥は、すでに化石になった天使だと。

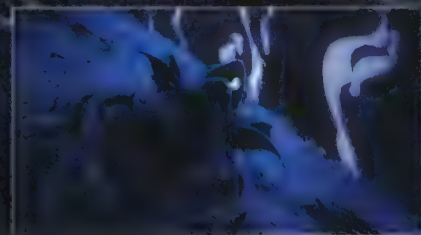
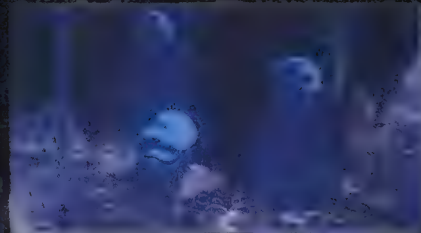
▼見あげている少年

▲少年の服をひっぱりながら、語りかける少女

▲少年は哀しげな顔をしている

◀そのとき、世界は再び激しい雨につつまれる

▲雨に打たれている“天使の化石”

〝……かくて七日の後　洪水地に
臨めり……地に動く肉なるもの
鳥　家畜　獣　地に匍うすべての
昆虫　および人皆死ねり……彼
地の面より水の減少しかを見んと
て　鳥を放ちいだしけるが　ふた
たび彼のところへ　還らざりき〟

「あなたは　だあれ？」

少年は少女のたまごを割り、立ち上ったたまごのなかにはなにもなかった。
夜明け。少年は、羽毛の打ちよせる海岸を歩いていた。肩には十字架のような銃が重かった。そして、その後、彼はだれにもあわず、だれも彼を見なかった。

天使のたまご GUIDE BOOK

PART・2
5つのインタビューと4つのコラムとイラスト・メッセージ

「天使のたまご」は、いままでのアニメーションとはひと味ちがった作品になりそうです。作品の基本テーマは押井さんに、美術については小林七郎さん、そのほか天野喜孝さんや名倉靖博さんにも話を聞きました。

天野喜孝さんが描いた初期イメージボード▶

1 原案・絵コンテ・監督 押井守

「たまごを割られることで、少女は現実に出あう」

▼テーマを語る押井さん

ルパンからはじまった

「天使のたまご」を語るには、実現しなかった押井版・映画「ルパン三世」第3作からはじめるのが、わかりやすいかもしれない。押井さんがそこで盛りこもうとしたのは〝もはや盗むものがなにもなくなったルパン〟という設定であり、そのルパンが盗もうとするものが〝天使の化石〟という〝あり得ないもの〟であった。それが、どういう形で「天使のたまご」に移し変えられたのか？

＊

AM「ルパン」で使えなかったアイデアが、そのまま「天使のたまご」に流用されていると思うのですが？

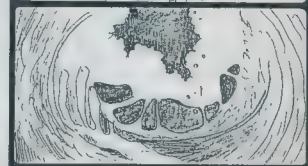
押井 設定を流用したのは〝天使の化石〟だけなんです。

AM 少女は？

押井 もちろん女の子も「ルパン」で中心的な役割を持っていた。けれども、人物設定がちがう。

AM 具体的に教えてください。

押井 「ルパン」の女の子は、20世紀の東京のど真ん中に出現した奇妙な塔に住んでいるんです。この塔を作ったのが、モーゼとガウディをたしたような老建築家で、少女は彼の孫むすめである。彼女は、老建築家の12人の弟子のうち、生き残った4人にかしづかれている。彼女は部屋を1歩も出ず、車いすで生活しているらしい。この塔で殺人事件がおこり、証拠写真に〝女の子の白い手〟がうつっている。ルパンがこの謎に挑もうと、塔にしのびこむ。内部に入ってみると、白い羽根が床に散っていたり、小動物の死がいなんかがある。じつは、この少女は、老建築家の孫むすめではないことが、不二子の調査によってわかる。この少女はいったいだれなのか？ じつは、少女は〝天使〟であって、人間をからかって殺していた、という話です。異様な女の子というか、塔そのものがダンテの「神曲」の〝地獄篇〟をもとにしていて、女の子はベアトリーチェ、というのがぼくのイメージだったんですけどね。

AM それにくらべると、方舟の少女のほうは、人間の女の子になっているわけですね。でも、なぜ女の子を出したいと思ったんですか？

押井 よくわからないんですよ、それは。むかしは、あたるとか夢邪鬼のオッサンとか、そういう人物のほうが好きだったんだけど(笑)。ただ、今回は〝いかにも少女〟という定着したイメージを利用したい、ということがあった。

〝ないもの〟を信じる少女

AM 少女は〝たまご〟をかかえている。彼女は、たまごがかえって、鳥になると信じている。しかし、たまごを割ってみると、なにもない。これにとまどう人も多いと思うんですが……。

押井 少女はたまごの中味を信じているわけだけど、その中味は、いまここにはないものである。つまり、〝たまごは割ってみなければ、なか

▼方舟の窓から、夕焼けの街をながめる少女（C・26）

▲ビンのなかのミクロコスモス（C・46～47）

▲少女はビンのなかに何を見ているのか（C・74）

▼魚の街の広場。まるで水族館のようなパノラマ（C・262）

▼自分が置いたたまごを少年からわたされる少女（C・161～162）

になにが入っているかわからない〃。それで、少年がたまごを割ったときに、なかにはなにもなかった。少女は〃ないもの〃を信じて生きていたわけです。たまごは、ことばを変えていえば、夢とか希望だと思う。それは、いまここにはないもので、可能性として存在しているだけである。しかし、夢とか希望を信じているうちは、人は、ほんとの現実とは出あっていないのだ、と思う。

AM　たまごが割られて、少女は自分の夢が破壊されたのを知る。そのときはじめて、ほんとうの現実に出あう、ということになるわけですね。

押井　ということですね。

AM　そのきっかけを作るのが、少年である。

押井　こういう人間関係はテネシー・ウィリアムズの「ガラスの動物園」に出てくるんです。ずっとなにかを待ちつづける女の子がいて、そこにある男がやって来て、それで去っていく。他者に出会って、世界が新しくなる、という話なんですけどね。

現実をになう少年

AM　一方、少年のほうは十字架のような銃をかかえている。これは？

押井　やはり現実をになって、ある重荷をしょって生きている象徴ですね。それが少女のまえに、圧倒的な他者として出現する。

AM　少年は〃鳥を見た〃という記憶をひきずって生きているわけですが、少年はあらかじめ、自分のさがし求める〃鳥〃が、もういないということを知っている、と考えていいわけですね。

押井　そうですね。もう鳥はいないんだ、天使の化石は鳥ではなかった。ただ、羽毛だけが残って、海岸に打ちよせられているような、そんな世界に、彼は生きているわけです。

AM　少年の追い求めていた鳥というのは？

押井　神話的モチーフとしての鳥なんだけど、こんどの作品では、それをできる限り生々しく描こうと思ってました。鳥というのは、なんか気持ちの悪いものなんだけど、さらに気持ち悪く描こうということで。

AM　ラストの羽毛は、もともと鳥なんかいなかったのだ、という意味なんですか？

押井　ノアの方舟から放たれた鳥は戻ってきたとされている。でも、ほんとうは、戻ってこなかったのではないか。海上で死んでしまったり、あるいはまだ飛びつづけていたりして、羽毛だけが海岸に打ちよせられている。鳥はいないんだけど、羽毛は舞い散るということで、ある情緒が出てくれば、ということですね。

AM　救いがある、とか？

押井　ラストでは、少女のほうには救いを託したつもりなんです。でも、いかにも予定調和的に出てくるんじゃなくて、ある種のわかりにくさを持たせてますけど。（次のページへ）

コラム①
ノアの方舟（はこぶね）

ノアの方舟のエピソードは、[illegible] 人間がはびこるのを見た神は、[illegible] ノアの一族だけが、それをまぬかれ、方舟を作ることを神に命ぜられる。現代的尺度でいえば約2万トン級の方舟に、ノア一族とひとつがいの動物たちが乗りこんだ。洪水は150日間つづき、方舟はアララテ山上に漂 [illegible]

※36ページから39ページのイラストは、すべて押井さんが描いた絵コンテからとったものです。

なぜキリスト教か

AM　キリスト教的モチーフが、この作品にはちりばめられているんですが、それは、なぜ？

押井　自分のオリジナルをやろうとすると、どうしても出てきてしまう世界が、キリスト教なんですね。どんな人にもある〝バックグラウンド〟が、ぼくの場合キリスト教的世界だったということにすぎないと思うんです。ただ、もともと、自分のなかに、宗教的情動みたいなものとか、妙な終末感があることはたしかです。

AM　こんどの作品の場合、現実の日本を舞台に、こういう一種観念的な作品をやることも可能だったと思います。それをあえて抽象的舞台にしたのは？

押井　まず、天野（喜孝）ちゃんのキャラだと、現実の日本を舞台にするにはツライ、ということがあった。それから、この企画以前のものが、すべて現実の日本を舞台にした企画だったんだけど、それがすべてつぶれてしまった、ということがあった。

AM　「ルパン」もふくめて……。

押井　そうです。ほんとは「天使のたまご」も、24時間営業のコンビニエンスストアのドタバタがあって、なぜか毎夜8時になると、方舟がドーンと入港してくる、というようなイメージを持っていたんだけど、なんかそれをやると、この作品もボツになってしまうような気がして。

AM　それで抽象的な舞台にした？

押井　現実的な要素はすべて切ってすてた、という感じですね。この作品は、いわば〝未来の側から作った物語〟といえると思うんです。ノアの方舟で生きのびた末裔の最後のひとりが、あの少女で、彼女がなにかに出あって、自分の世界を崩壊させてしまう。少女が自分のカラを破ることで、変身してしまうならば、彼女のもともといた世界にピリオドを打ってもかまわない。

AM　つまり、あの世界は彼女で終わりになる？

押井　ということですね。あの世界そのものが、少女の自我の作り出した世界だったかもしれない。少女の自我の範囲でしか、あの世界は存在しなかった。たまごを割られることで、少女の自我が変貌する。そのとき、あの世界も姿を変えるはずである。もし、この作品に宗教的意味が出てくるとしたら、そこにしか出ないと思いますね。

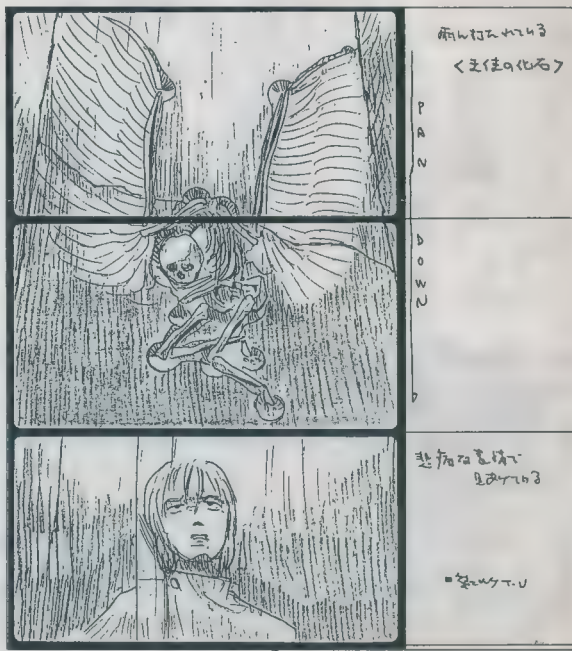
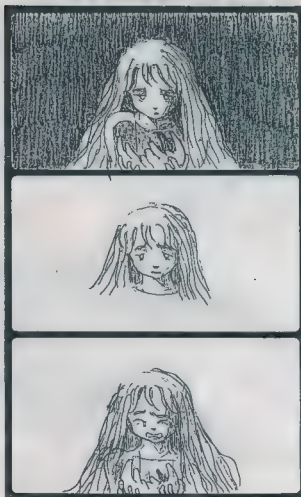
AM　宗教的意味というのは、他人に出あう

コラム②　天使と鳥

▲天使の化石を見あげる少年（C・318～319）

▲オペラハウスの窓から外を見る少女（C・238）

ジャムをなめる▶（C・136）

▼たまごを割られて泣く（C・373）

ことで、自分の世界をこえたなにかが新しく見えてくる、というような意味ですね。

押井　そうですね。新約聖書の世界というのも、いわばイエスとの出あいが、いろんな人に宗教的回心をもたらすという、出あいの話なわけてです。

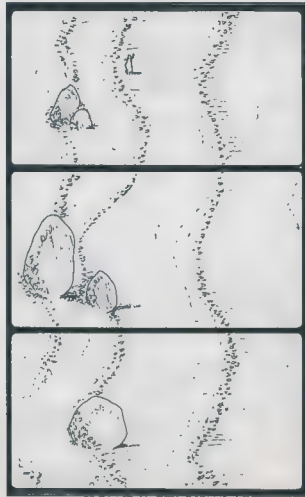
古典の捏造（ねつ）

押井　それで思うんだけど、ぼくのやっていることは〝古典の捏造〟なんだ、ということです。

AM　古典の捏造？

押井　ええ。ほっとけば、どんどん古典のほうに吸収されていく物語を捏造しているんだという感じがする。ほんとうはもっと、うさんくさい安ピカ物でうめつくされた世界から、なにか清浄なものが出てくる映画というイメージだった。それが、どんどん〝芸術映画〟のほうへ純化されてきた。ここまで純化された世界になるとは思わなかったけど、ここまできてしまうと、出来あがったものは妙に〝古典の顔〟をしている。このフィルムを作っている途中で、自分は古典を捏造しているのだ、考えるようになってきたんです。

AM　捏造ということは、古典にそっくりな作品を、あえてそれを意識しつつ作るということ？

押井　そうですね。映画というのはもともと、うさんくささをどこかしら持っている、ジャンルなんだと思うんです。すべて人工的な操作のもとに作られているのに、どこか芸術っぽい顔も見せたりする。この作品の場合、なにがそれにあたるのか、というと、やはり、古典のような顔をした作品を捏造するということなんだ、と思うんです。だから、少女のイメージも、いままであった少女像みたいなものを、すべてとりこんだうえて、たまごをだいているというような、妙なまなましさを持ったものとして、描いているわけです。

▲海岸を歩く少年（C・404）

「天使のたまご」イベントスケジュール

〈学園祭予定〉

[1] 11月24日(日)学芸大学学園祭・小金井祭(東京・中央線武蔵小金井駅下車小平団地行きバスで、学大正門前で下車)10時30分より12時まで「押井守・夢の世界」と題した講演(予定)があります。なお、11月21日～24日の学園祭のあいだじゅう「うる星やつら・ビューティフル・ドリーマー」と「天使のたまご」の予告編のビデオ上映があります。無料。
(問)小金井祭実行委員会　自治会室☎0423(23)9913　佐野正文　また夜間の問い合わせは☎0423(44)9759　佐野正文自宅まで。

[2] 11月24日(日)東大文化祭・駒馬祭(東京・井の頭線駒場東大前下車)午後2時より、押井守さんの講演と質疑応答が1号館184号室にてある予定です。なお、11月22日～24日の学園祭期間中「クラック」を初めとする海外アニメの上映「天使のたまご」の予告編上映があります。カンパ制ということです。
(問)東大SF&アニメ研　荒井☎03(428)8095まで。

なお、[1][2]両文化祭では「アリオン」の予告編も上映されます。

〈完成記念イベント〉

[1] 12月8日　大阪・梅田東映ホール
[2] 12月15日　横浜・アニメイト
[3] 12月25日　仙台・アニメイト
[4] 12月26日　高崎・アニメイト
[5] 12月27日　福岡　アニメック
[6] 12月28日　広島　アニメージュスタジオ

どの会場でも「天使のたまご」完成フィルムのビデオ上映と、押井守さんか天野喜孝さんの挨拶がある予定。すべて無料。なお、詳しい時間・内容・場所については次号に掲載します。ただし、12月8日のイベントについては、☎06(344)5959　アニメポリス・ペロへ。

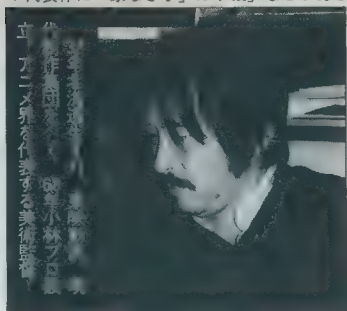
また「天使のたまご」映画興行については本誌52ページを参照して下さい。

イベント、映画興行ともたくさんの方の来場をお待ちします。

2 美術監督・レイアウト監修 小林七郎

「全背景にセルをかさねる手法を試みました」

▼代表作に「家なき子」「カリ城」などがある

▼小林さんによれば「血のように赤黒い」夕焼けの風景

「天使のたまご」という作品に存在感を与えるもの――それが小林七郎さんの美術である。押井さんとは、「うる星やつら・ビューティフル・ドリーマー」につづき、2度目の共同作業。「天使のたまご」では、背景のうえに、さらにタッチを描きこんだセルを1枚のせるという手法を、すべての背景にわたって採用している。それは、つねにより良き作品を生み出そうという小林さんの姿勢のあらわれでもある。

■

AM　この新しい手法を使おうと考えたのは、なぜでしょう。

小林　それは画面のリアリティを出したいと考えたからです。現在のアニメーションは、どうしてもキャラクター中心で、美術は単なる背景であって、適当にやっておけばいいと考えられている。美術が主張しすぎるとキャラクターが死んでしまう、と考えられている。ぼくは、この考えはおかしいと思うんです。新しい表現というのは、画面全体がガンと前面に打ちだされるものでなければならない。道ばたの小さな石コロひとつにも存在感が感じられるような画面が必要だと思う。そのためには、背景がキャラクターと同格の存在感を持たなければならない。背景自体に、強い発言をさせる必要があると思う。そのためには、形・線・タッチ・色づかい・明暗など、美術の持ついろいろな要素を、きわだたせたあつかいにしようということです。それで、全背景に、セルを1枚のせ、そのセルに、サインペンで、エッチング風というかペン画風というか、そういうタッチを入れたり、さらに色をのせたりしているわけです。

AM　つまり、キャラ中心の作品ではなく、画面全体がその存在を主張する作品にしたい、ということですね。

小林　そうです。キャラ中心のおもしろさだけ追っていく作品が、いまのアニメ界に多すぎる。それは刺激が強くなって、エスカレートしていくだけです。それは不毛な道で、ひいてはアニメーションを退廃させるだけですから。

AM　こんどの背景のうえにセルをかさねるという手法は、いわゆるハーモニー方式とはちがうのですか?

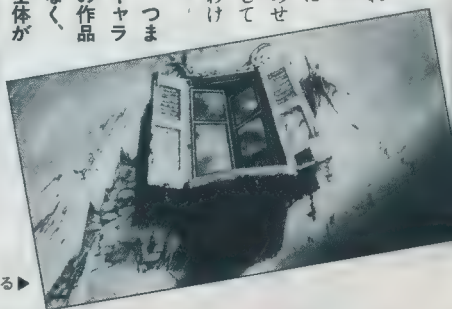
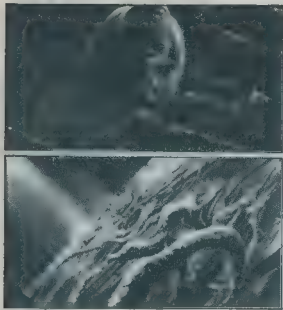
小林　発想は似ていますが、ちがいますね。

AM　具体的にいうと?

小林　こんどの作品は黒が中心です。紙にぬった絵具の黒は、撮影のとき光をあてると、表面が乱反射するので、黒い色の出かたがちがってきます。それで、紙の背景の黒のうえに、さらにセルにウラ塗りした黒と、サインペンで描きこんだタッチの黒をのせる。つまり、黒のうえに黒をのせているわけです。セルをのせることで、下の黒い色は沈んだ感じになり、セルの黒がみえてくる。ある部分では、このセルが何枚にも重なるので、何段にもマルチを組んだような効果が、色彩的に出るわけです。

背景の上にさらにセルをかさねる手法をとる▶

黒を基調にした色彩▶

AM　全体の色彩設計は、どう考えていますか?

小林　押井さんは"色のない世界"にしたいということですね。だから黒中心の世界にして、そのなかにキャラの色が1点かすかに存在している。最初は、血のようなまっ赤な夕焼けではじまり、途中の世界は黒で、ステンドグラスが唯一の色彩を持っている。そしてラストは夜明けの青白さ。すみきった色調になる、という感じです。色としては、ほとんど黒かグレー系の色で、ときどき、微妙なグリーンや青がある、というところでしょうか。

AM　美術としてたいへんな部分というのは、どのあたりでしょうか?

▼点景もおろそかにしない

▲方舟の内部、壁面に残る化石

▲歴史の重さを持った街を、美術で表現する

小林　それは、最初から最後まで全カットです(笑)。ギッシリ全部そうですね。しいてあげるならば、街の噴水の周辺の彫刻的なものが、技術的にはたいへんだといえるでしょう。

AM　小林さんは、この作品のテーマをどう考えますか。

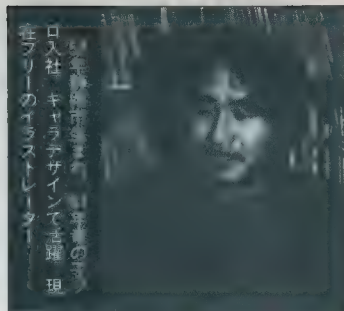
小林　それが難しいんですね。押井さんはあんまり説明しないんです。だから、描いているうちにだんだんわかってくるという感じですね。人類の歴史と、人間の情念をふくんだテーマなんでしょうね。押井さんが、現世に生きている人間を否定的にみていることはわかります。たとえば、世の中の悪い面や、体制なんかが、悪としてうつっている。それで、よりよいものを求めるから、現状を否定しようとする。しかし、現実にも肯定すべき部分はあるわけて、押井さんは、そのあたりをどう考えているのか。それがまったくわからないですね。押井さんの若さが作らせている作品かもしれませんね。それと、"救い"がないような感じがするんですね。これをほのめかしてくれたら、全体の暗さが生きたのに、と思います。押井さんとしては、ラストの夜明けに救いの光のイメージを、託しているんだと思うんですが。

AM　小林さんとしても、かなり力の入った作品になりそうですね。

小林　ぼく自身の姿勢はいつも同じなんです。ただ、いままであまりにも美術軽視の時代が長かったと思う。しかし、作品を支えるものとして、美術や音楽というのは、きわめて大きい要素であるはずなんです。ぼく自身は、芸術性をひきずりながら、いままで仕事してきた人間ですから、この作品でも、格調高くやろうということです。いい作品が歓迎されて、ちゃんと観客が見てくれるという状況を作るためにも、がんばっているわけです。

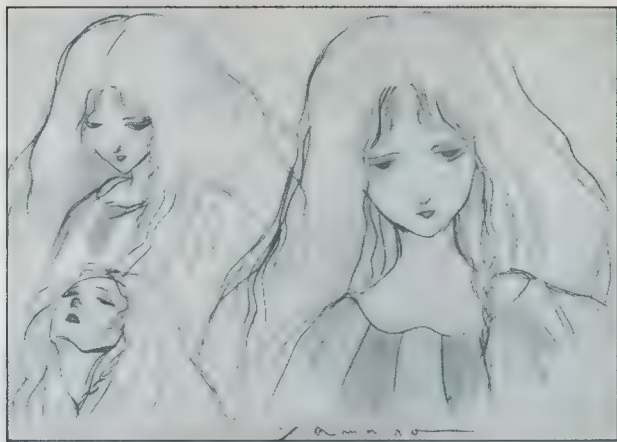
3 原案・アートディレクション 天野喜孝

「仕事は苦しかったけど、勉強になった作品でした」

▼スタジオの天野さん

星雲賞のイラスト部門を3年連続受賞するなど、SFイラストの分野での活躍がめだっている天野さん。「天使のたまご」では、キャラクター作りだけにとどまらず、原案や各シーンごとのイメージ作りなどに初挑戦している。参加のいきさつから、聞いてみよう。

＊

AM　押井さんから話がきたのは?

◀変身後の少女のイメージイラスト

天野　昨年末に「ルパン」の残念会をやったんです。そのときに来年はいっしょにやろう、といわれたのが最初でしたね。

（編注・映画「ルパン三世」第3作は、監督・押井／アートディレクション・天野で企画が進行していたが、実現しなかった。だから年末の残念会となったわけ）

AM　「ルパン」からひきずっていることもあるわけですね。

天野　でも「ルパン」でした仕事はアニメージュ用に描いたイラストだけなんですよね（'84年10月号と12月号）。「ルパン」のストーリーから、天使の化石のある塔の部分をとり出したのが、この「天使のたまご」なわけで、絵のイメージは変わっていないんです。

AM　少女や少年のキャラについて、押井さんからの要求は?

天野　要求というよりも、自然に出来あがったという感じです。とくに、少女のほうは、ふつうに描いたらこうなってしまったという感じですね。押井さんのイメージとぼくのイメージが一致していたんだと思います。

AM　今回は、キャラ作りのほかに、大量のイメージボードを描かれていますね。こういう作業ははじめてだったのでは?

天野　場面設定みたいなことは以前にやったことがあったんだけど、各シーンのイメージボードを独立してやったというのははじめてでした。

AM　どのくらい描いたんですか?

天野　カット数でいうと200カットぐらいのイメージボードを描いたと思います。枚数はもっと多くなりましたけどね。

AM　押井さんの絵コンテを読んだ印象は?

天野　絵コンテからうける印象はみんな同じだと思うんですね。難かしいというか、よくつかめないというか。ぼくの場合は、絵コンテを読んで、ぼくが感じた部分を絵にする作業だと思っていたんです。絵コンテから飛躍するのが自分の仕事だ、と思ってやってきました。だから、あえて好き勝手に描いたほうが、良い結果が出るんじゃないかと思って描きました。

AM　イメージ作りでたいへんだった部分はどこですか?

天野　街のシーンですね。とくに魚が出現する前あたり。いちばん苦しかったけど、でも勉強になりましたね。建物というのは、いままであんまり描いたことがないんですよね。

AM　あの街にはモデルのようなものは?

天野　とくにないんです。資料用の写真をみたりして描いたので、やっ

たまごを割られたあと、少女は変身する▶
その変身後のキャラ・イメージ・イラスト

ぱりヨーロッパ風のイメージですね。

AM　3分半のプロモーションフィルムをご覧になった感想は？

天野　しっかり作ってあるという感じでしたね。各パートがそれぞれがんばっているし、音楽もよかった。キャラはピッタリ。自分のイラストが動いているような錯覚をしました。いままでにない経験ですね。ぼくの絵をそのまま線にしても、ああはならない。名倉（靖博）くんが、1本の線ごとにこだわって描いてくれて、それがピッタリくるという感じでした。それが驚きでしたね。

AM　実際のキャラ設定は天野さんがなさったんでしょう。

天野　いちおうデザインは描いて、影のつけ方なんかは考えたんですけど、線は作監のほうでまとめてもらったんです。ぼくがまとめて、ぼくの線でやっても、ああいう感じのキャラにはならなかったでしょうね。

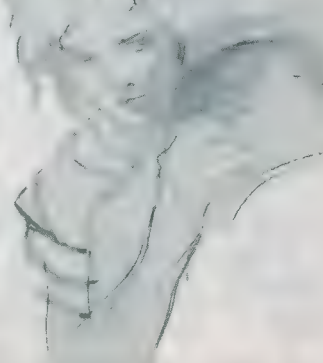
AM　美術については？

天野　ぼくのイメージボードは、白い紙に色をつける作業で余白がいっぱいある。美術の場合は、空間を作り、なおかつ白い部分があってはいけない。そういうちがいが前提としてあります。それをふまえていうと、セルとピッタリあっているという感じがしましたね。美術と色指定については、プロ意識を感じました。

AM　さて、天野さん自身としては、この「天使のたまご」はどんな作品になると思いますか？

◀右・銃をかついだ少年の初期キャラ
◀左・同じく初期キャラ正面

▶同じく少年の初期キャラクター

▲少年の初期キャラクター・イメージ

天野　出来あがって、見てみないとよくわからないですね。ほんとは、仕事にかかわった人間としては、出来あがりが見えてなきゃいけないんでしょうけど。出来あがったときの予想がつかない作品ですね。見たあとなにが残るか、それに興味があります。感動が残ればいいなと思っています。

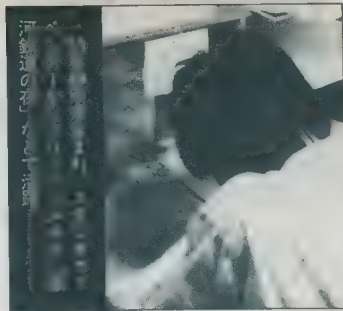
AM　押井さんと本格的に仕事をするのははじめてだったのですが、最後に押井さんの印象を。

天野　もっとムチャクチャやってる人かと思ったら、意外に普通の人でした。アニメの演出という仕事そのものが、人が思っているより地味な仕事なんでしょうね。人集めも実力のうち、みたいな感じでね。ぼく個人としては、絵の作業をかなり好きにやらせてもらって、感謝してます。

※このページのイラストは、すべて天野さんが描いたものです

4 作画監督 名倉靖博

「線を少くしようと思っているのに、そうならない」

▼名倉さんは写真がきらいなのです

名倉さんに以前取材をしたのは、8月の中旬で、作画がヤマ場に入るまえだった。そのとき、彼の顔は生気に満ち、頬は紅潮し、ことばに力があった。そして、いま——。

作画がようやく山場をこした10月下旬のある日、彼にあった。心なしか頬はこけて青白く、髪の毛に白いものがまじっている。しかし、血や肉が、みんな熱で気化されて、皮膚がだんだん透明になっていくような、そんなさわやかさがあった。

それは、自分のすべての力をこの作品に傾けたという無言の証明である、と確信させるにたるものだった。名倉さんに、その格闘の3か月をふり返ってもらおう。

＊

AM　白髪がふえましたね。

名倉　そうですか？　自分ではよくわからないんですけど……。

AM　髪の毛の夢はもうみなくなりましたか？

名倉　ええ。それはもう、だいぶまえに、終わりました。（編注・作画に入ったばかりのころ、名倉さんはよく、女の子の髪の毛の夢をみたのです）

AM　いまの状況は？

名倉　作監作業は終わって、自分の担当の原画がすこしと、あと動画を1カット手つだうことになってます。

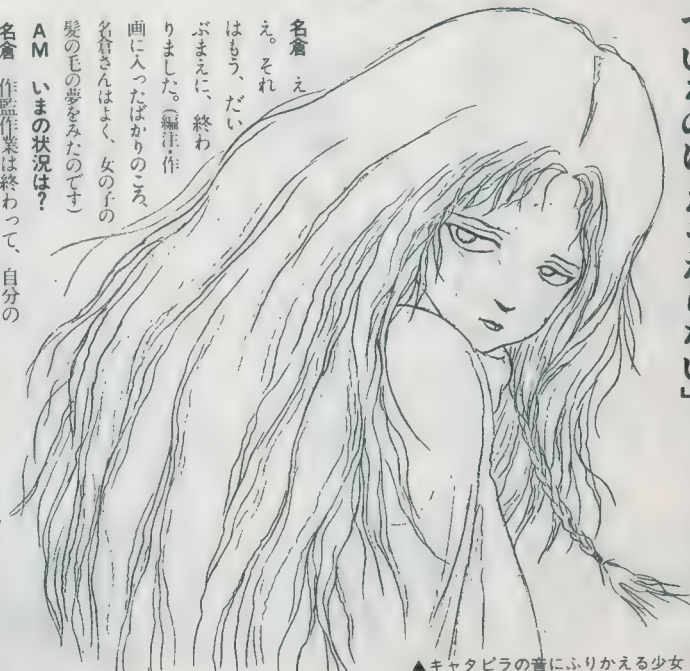
AM　その動画をやるカットは？

名倉　少女が目ざめるシーンなんです。このカットにはこだわりがあったから……。

AM　こだわりというと？

名倉　いや、たいした意味じゃないんですけど、まえにやった「綿の国星」のときに、このカットと似た、チビ猫が目ざめるカットがあって、そのときにあまり動かせなかったので……。「天使のたまご」のほうは、原画はべつの人が描いたんだけど、それがよく動いているので、動画をやりたいな、ということになって。

AM　作画的にはたいへん？

名倉　いえ、枚数としては動画100枚ぐらいなんですけどね。でも、動画をたのむ人がいないというのも、ぼくがやる理由の半分ではあります。

AM　名倉さんの作監修正を見ると、ほとんど新たに原画を描き直しているというふうにも、見えるのですが。

名倉　そうでもないけど、描き直してしまったものもあるんです。

AM　たとえば？

名倉　少女の顔が水没していくイメージカットがあるんです。そこは江村（豊秋）さんが原画を描いて、それもいい原画だったんですけど、天野（喜孝）さんのイメージボードにもっと近づけたくて、描き直したんです。ここは、動画がかなりたいへんなんですよね。

AM　枚数的に？

名倉　ええ。1日朝から夜中まで描いても、15枚ぐらいしか出来ないのに、全部で300枚以上必要なんです。とても上手なベテランの人に頼

◀棚からビンをとろうとする少女

▲キャタピラの音にふりかえる少女

コラム4
少年と少女

んだんですが、いったんは無理だといわれて、ことわられたんです。

AM　密度もかなり濃い？

名倉　ええ。中央に女の子の顔が小さくあって、まわりは全部髪の毛ですから。それが、もともと全部動きながら、そこに水が浸入してくるから、その動きを、全部トレスしなきゃならない。

AM　ハアー………。**それを300枚描くわけですね。**

名倉　そうなんです。でも、このカット用に天野さんが描いたイメージボード（※）が、大好きなんです。よくみると目の位置が、左右ちがったりしてるんだけど、そういうことが気にならないぐらい、全体のふんい気がよくって……。あれがデッサンがきまった絵だったら、印象は変わっちゃうでしょうね。

AM　天野さんのイメージボードは、かなり役に立ったわけですね。

名倉　ええ。いつもそのボードを見ながら、イメージをつかむようにしていましたから。それがうまくいったかどうかは、フィルムを見てみないと、わからないけれど。

少年の髪の毛にも注目▼

AM　押井さんも似たようなことをいってらしたけど、考えようによっては、あんなに髪の毛の描きこみを入れなくても、出来たとは思いませんか？

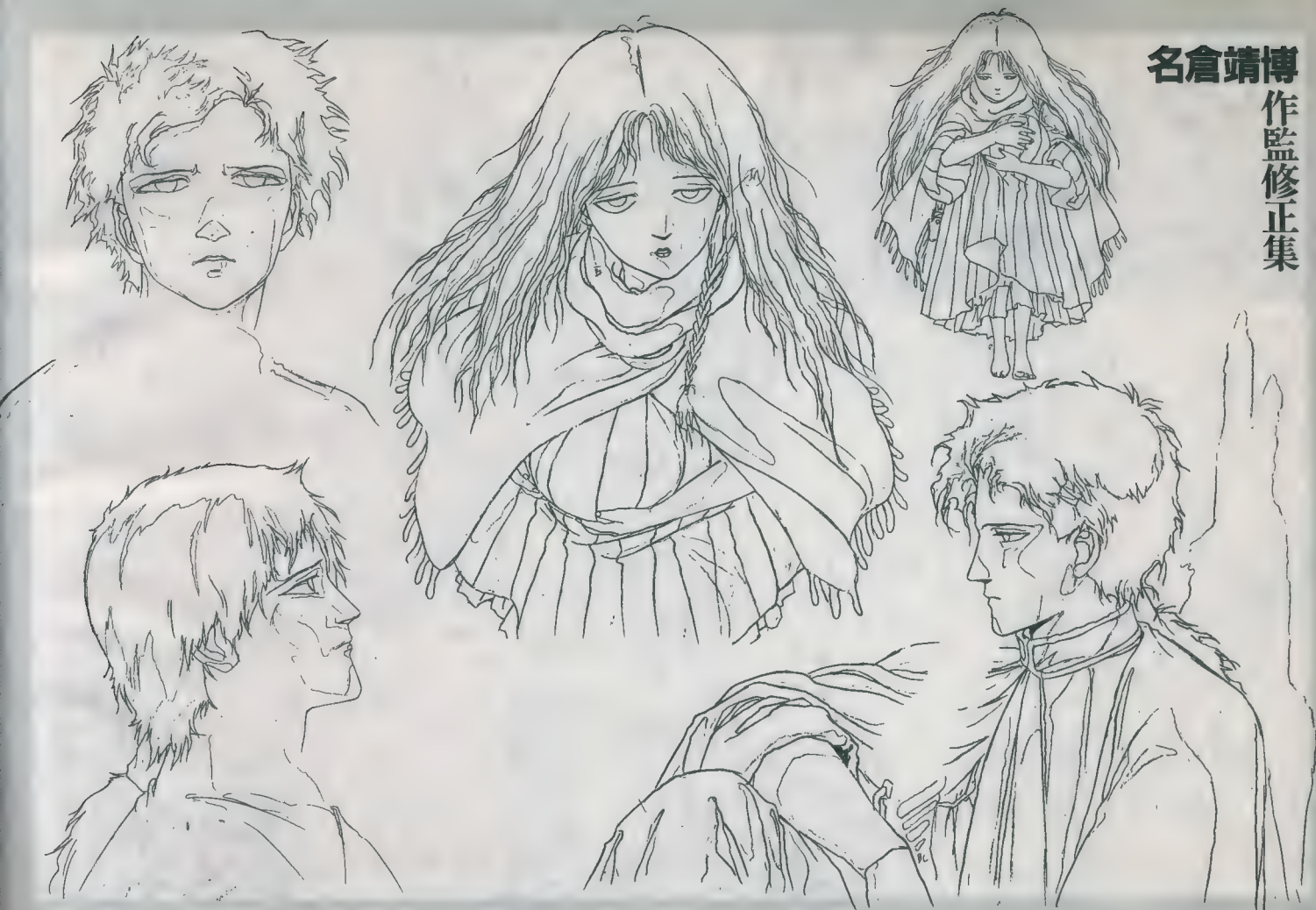
名倉　自分がラクしようと思えば、線を少なくするんでしょうけど…。やっぱり、あとのことを考えないで、最初に描きたいものを描いてしまうから、いけないんでしょうね（笑）。あとにひけなくなっちゃって。「メモル」のビデオをやったときも、そうだった。でも、いつも、線を少なくしようとは思っているんです、ほんとに。でも、どういうわけか、その逆になっちゃうんです。

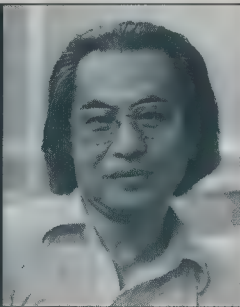
AM　かなり作画的にはシンドイ作品でしたね。

名倉　もうアニメーションはこれで最後にしよう、と思ったくらい……。あんまりカット数があがらないから、自分はアニメをやってちゃいけないんじゃないか、と考えました……。でも、動画チェックの人ががんばってくれたり、みんなが協力してくれて、やりがいのある仕事だった。たぶんこういう作品を作れるのは最初で最後だと思います。押井さんには、迷惑をかけるだけかけたから、満足です（微笑）。

◀たまごを抱いてすわる少女

※11月14日発売のＡＭ文庫「天使のたまご」30〜31ページに出ています

名倉靖博 作監修正集

5 声の出演 根津甚八・兵藤まこ
録音監督 斯波重治

「人間がしょっている重みを声に出せる人にお願いした」（斯波重治）

TV「うる星やつら」、映画「風の谷のナウシカ」などの録音監督。オ[illegible]代表取締役。

セリフの少ないこの作品では、声をあてる俳優さんの演技力が相当ものをいう。斯波さんに配役のねらいを、そして根津さん（少年）と兵藤さん（少女）にはアフレコ前の心境を聞いた。

＊

この作品は形而上学的・観念的・啓示的内容のものです。少年から青年に移り変わる年代の"少年"、子どもから大人に変わっていくころの"少女"という、キャラクターの年齢に近い人のキャスティングとも考えましたが、先の内容をふまえて、声の芝居の中に存在感を感じさせる俳優さんにお願いしました。人間がしょっている重みが、画面を通じて声の中に出ている人を選んだわけです。

兵藤さんは、アニメーションは今まで1回も経験がありません。けれど、オーディションテープを聞いたとき、少女にピッタリであり過ぎて役者の存在感が薄れてしまうのでは、と危惧されたほど、イメージ的には少女に合った声の人です。少女の日常生活感を払拭し、かつ、この作品の少女がもっているリアリティを、押さえた単々としたしゃべりで、きちんと出していける人だと最終的に判断して、お願いしました。

根津さんについては、監督の当初からのイメージで決まったというところです。アニメーションは「ボビーに首ったけ」を以前演じていますが、あれはキャラクターが優しい人物に作ってあって、この少年とはまったくちがう。だから、とくに「ボビー」を意識して選んだということはありません。

アフレコは、11月15日と16日の予定です。10月14日の監督とおふたりの初顔合わせ的ミーティングでは、根津さんから、「アフレコ前に全編フィルムを見たい」という要望がでました。根津さんが、フィルムを見て、この少年をどんなふうにつかまえて演じてくれるか、ぼく自身もとても期待しています。

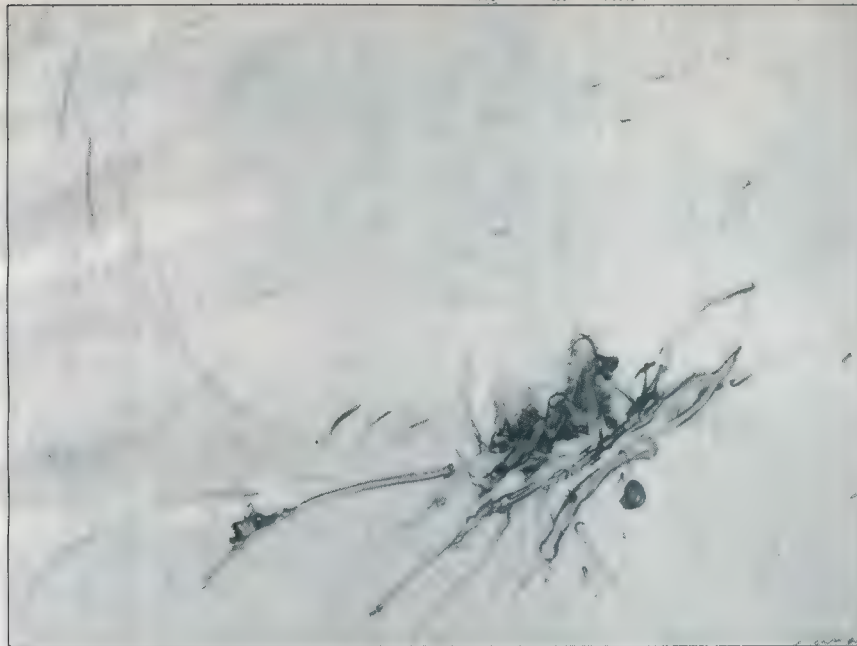
[illegible]場から、[illegible]・映画界へ「[illegible]」「さらば愛しき大地」「乱」な[illegible]に出演。[illegible]旬報主演男優賞も[illegible]。現在は「誇りの報酬」（NTV系）に出演中。

少年の顔とぼくに似せて作った人形の顔
根津甚八

アニメーションは、テレビで放映されるディズニー作品や、テレビの「うる星やつら」を時々見る程度で、ほとんど見ないといっていい。そのせいか、このあいだ見た「天使のたまご」のフィルム（予告編と一部分のラッシュ）の、非常なこまかさ、たとえば風の感じ、水の感じとかは、ほんとうにリアルに描かれているので、技術的にびっくりしました。

（ぼくが演じる）少年は、いつ生まれて何年生きつづけたかわからない少年。年齢不詳ですね。風貌は少年でも、髪はまっ白で。どういう声を出していいのかは、画面をぜんぶ見てからじゃないとわからないけど……。なにしろ自分の体じゃないものにのっかるわけですからね。でも、作品の全体像をつかんでいる監督のほうで、ぼくのイメージをつかんでキャスティングしてくれたというので、安心はしています。

安心という点でもうひとついえば、少年の顔が、角度によって唐(十郎)

[illegible]アイドルに[illegible]。昭和55年に「[illegible]かさきはあは[illegible]らいと」で歌手デビュー。以後「太陽にほえろ」などへのTV出演、FM東京"MIDNIGHT DISC ROAD"でのDJなどを担当。昭和37年9月7日生まれの23歳。

さんの「少女仮面」という舞台で使った、ぼく、そっくりの人形にすごく似てるところがあった。そのへんで、なんかちょっと安心したところがあります。まあ、へんな少年というのは、今までにもやったことがありますしね。たとえば、精神病院から逃げだした少年とか、夢を追いつづけている少年とかね。だから「天使のたまご」の世界も、とらえられない世界ではないですね。

テーマについてですか？　うーん……、現代に生きている存在のあやうさみたいなものを描こうとしているのは、感触としてはわかりますね。それと、少年と少女が男と女の関係を象徴しているのは、わかります。存在しないかもしれない鳥、単純にいってしまえば、鳥は夢ということだと思いますけど、それを追いつづける男は、たまごをもっている女にとっては、きっかけでしかないというのは、わかる気がしますね。

声の仕事は、その声によって作家の世界に現実味をおびさせる、観客と作家とのパイプ役。成功すれば、声だけの仕事も変わっていておもしろいんじゃないかと思ってます。

よろしく！

▼天野さんが描いた初期イメージボードの少年と少女

少女の声に決まった日に買った古い絵ハガキ

兵藤まこ

監督との顔合わせの前に、アフレコ台本を3度読んだのですけれど、あまりよくわからなくて「なんなのかしら？」という印象でした。で、疑問に思ったことを書きだしてみたんです。たとえば①少女はどうしてビンを集めているのか？　②少女はどうしてひとりで水没する都市にいるのか？　③少年は、何故、少女のたまごを割ってしまうのか。ふたりのあいだに愛情がめばえていたら、たまごを大切に見守って育てていくはずなのに？　などなどです。こういった疑問も、押井監督との顔合せでお話しを聞いて、だいぶわかりました。けど、そういった象徴的なことがらを伝えようと「これにはこういうウラがあるんだ」というふうに演じてもうまくいかないと思うし、まして吹きかえの仕事は初めてですから、思った通りにやるしかないといまは考えています。

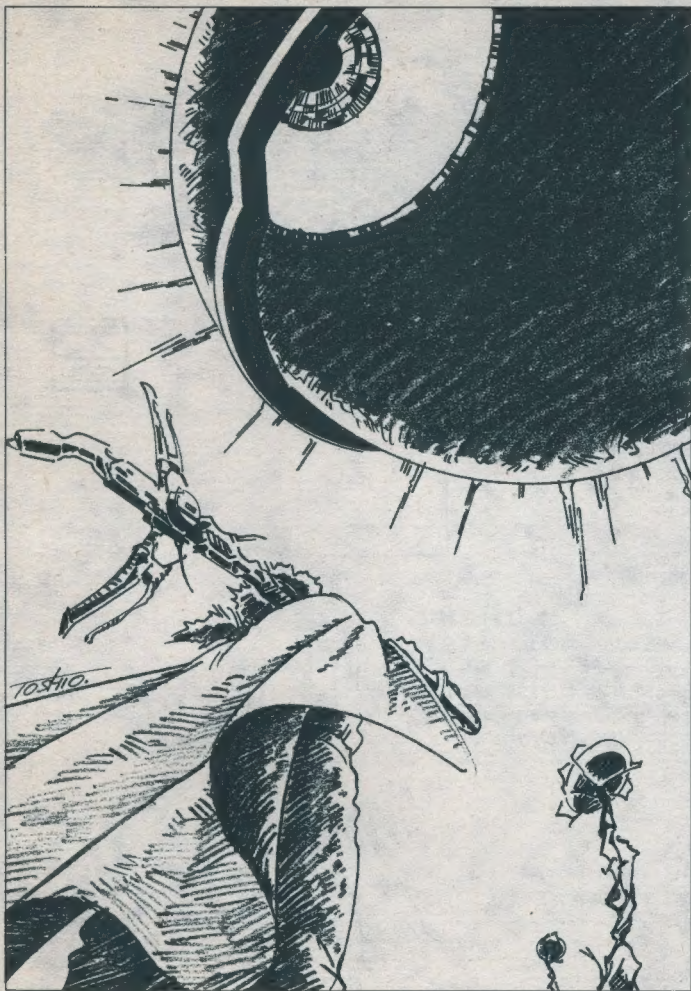
14歳からモデルや歌の仕事をしたりしてますけれど、自分の顔が自分らしく写らないテレビや、写真の仕事はどうもなじめなくて。その点、声だけならじっくりやれる仕事じゃないかと、20歳すぎのころから声の仕事をしたいと思っていたんです。ですから、今後もアニメーションの仕事のほうも、チャンスがあればやりたいと思っています。でも「天使のたまご」のフィルムを実際見てみると、少女の髪の毛の微妙な動きとかがすごくて、あの世界をくずさないようにできるかなあという不安も、わくのですけど、ね。

これは、ちょっと余談ですが、少女の声に決まったという報せがあった日、私、代官山（東京）のアンティークショップで古いフランスの絵ハガキを買ったのです。少女がふたり写っていて、それがかわいかったから手に入れたんですけど、よく見たら、その女の子、手にたまごを抱いているんですよ。これ、偶然かしら？　なんか不思議な体験でしょう!?　どう思います？

6 5人の男性原画スタッフによる「天使のたまご」を終えて

作画を終えた原画マン5人に、イラストを描いてもらいました。なぜか、5人とも、現在は「天空の城ラピュタ」に参加しています。苦労がしのばれる絵です。

▼**高坂希太郎**
'62年生まれ。'80年にＯＨ！プロ入社。「南の虹のルーシー」「じゃりン子チエ」「ルパン三世ＰＡＲＴⅢ」などの原画を担当。怪魚の出現シーンを中心に作画を担当する。

◀**河口俊夫**
'59年生まれ。グリーンボックスをへてフリー。「ゴールドライタン」「ウラシマン」などの原画。この作品では、冒頭の太陽の沈むシーン、羽毛の乱舞などを作画。

タマゴ
食イスギタ…

▲遠藤正明
'60年生まれ。テレコム入社後「ホームズ」などの原画を担当。現在フリー。街に魚がはじめて出現するシーンを担当した。ちなみに魚のモデルはシーラカンスだそうな……。

▶江村豊秋
'54年生まれ。竜の子プロ→東京ムービー→ぴえろをへて、現在フリー。「ダロス」「エリア88」などの原画。少女がたまごを割られて泣くシーンなどを作画した。

◀大塚伸治
'55年生まれ。トミプロ→フリー→あんなぷる、そして現在フリー。「コブラ」「レンズマン」などの原画。方舟のなかの少女と少年のシーンなどを担当した。

●編集後記●

「天使のたまご」は押井守監督の、長編第4作にあたり、オリジナルビデオとしては2本目の作品になります。押井さん自身の原案をもとに作られているので、いままでの作品では隠されていた押井さんの潜在的モチーフが色濃くあらわれた作品になりそうです。そのモチーフとは、たとえば、自分にとって他人とはなにか、自分のいるこの世界は自分の死とともに消滅してしまうのではないかという現実喪失感、夢や希望を語れるうちは人はほんとうの現実にまだ出あっていないのではないか、などというものです。背景としてのキリスト教的世界も、この作品にははっきりしるされています。「天使のたまご」を見たあとで、自分のなかにどんな問いが残るか。そんな作品になりそうです。

（片桐卓也）

●参考文献▼筑摩書房刊「世界古典文学全集第5巻・聖書」関根正雄・木下順二編▼近藤出版社刊「キリスト教図像辞典」C・モーリ／G・ファーガソン／中森義宗訳編

●スタッフ▼構成・文／片桐卓也▼レイアウト／庄内真▼ウラ表紙原画／名倉靖博▼協力／柳沢因（AM）

昭和60年12月10日発行（毎月1回10日発行）第8巻第12号　昭和59年5月15日国鉄首都特別扱承認雑誌第7532号